

あなたのいる場所すべてが、
群馬銀行になります。

Gダイレクト
インターネットバンキング

インターネットからも
お申し込みいただけます。



あなたの夢、応援します。
群馬銀行

昭和小学を南小へ編入統合

被災地の春遠く

桐生発の支援続く

「風化させない」泥かき隊員の思い

暦の上では立春だった4日朝、雪景色に包まれた宮城県南三陸町の被災地に、桐生発の災害支援ボランティアたちが降り立った。通算67回目となる日帰りの往復バスでの泥かき作業。50回以上通い続ける人もいる。厳寒期の人手不足もあって、被災地の復興はいまだ道半ば。桐生発の「泥かき隊員」たちは年齢も性別もさまざまだが、「震災を風化させない」との思いは同じだ。



津波が突き抜けた町営住宅の部屋で、泥まみれのがれきを分別する災害支援ボランティアの人たち（宮城県南三陸町志津川で）

津波に市街地ごとのみ込まれ、爪あとが色濃く残る南三陸町志津川地区。海のすぐそばに立つ3階建ての町営住宅がこの日、桐生発の泥かき隊に託された現場の一つとなった。

屋根の上には大量のがれきが残る。部屋の中も、泥まみれのがれきが手つかずのまま。それらを手作業で外に出し、持ち主に返す貴重品などを拾い集めた上で分別回収する作業だ。

桐生発の泥かき隊とは、桐生災害支援ボランティアセンター（宮城由高センター長、川田力也リーダー）主催の週末日帰りバスツアー参加者。町営住宅の作業には、一般約20人に樹徳高校の志願生徒約30人の計50人が参加した。

ときおり雪が舞う中で約4時間、大人と高校生が一緒に作業をこなす。「これは捨てるられない」。がれきの中から写真など思い出の品を見つけたたびに、被災者のつらさを実感し言葉を失った。かわいらしい赤ちゃんを写した古い写真や小学生が手書きした詩や作文を見つけ、現在の安否を気遣う参加者。「この町営住宅に住んでいた子どもは全員無事」との情報に一堂ほっと胸をなで下ろす場面もあった。

成感はある。でも、被災地の現状を見れば100%にはならない。もっと何かができると思う」「同じ志をもった仲間がいて、新しく参加する仲間がいて、喜んでくれる人がいるから、また行きたくなる。その繰り返しです」。その一方で、心配なこともある。「まだ（泥かき）行ってるの？」と言われることが最近多い。震災を風化させないためにも、ぜひ多くの人が参加してほしい」と呼びかける。

「阪神大震災や新潟県中越地震のとき、国外にいた自分は何もできなかった。3年前に帰国し、今回の震災で津波の映像を見て、今度こそ被災地に行く」と決心した桐生発の泥かき隊を支援する引率者役で、60回近く被災地に通い続ける金子瑞穂さん（37）は、桐生市は、活動の原点にある思いをそう語る。

「行くたびに少しはお役に立てたかなという達成感がある。でも、被災地の現状を見れば100%にはならない。もっと何かができると思う」「同じ志をもった仲間がいて、新しく参加する仲間がいて、喜んでくれる人がいるから、また行きたくなる。その繰り返しです」。その一方で、心配なこともある。「まだ（泥かき）行ってるの？」と言われることが最近多い。震災を風化させないためにも、ぜひ多くの人が参加してほしい」と呼びかける。

「阪神大震災や新潟県中越地震のとき、国外にいた自分は何もできなかった。3年前に帰国し、今回の震災で津波の映像を見て、今度こそ被災地に行く」と決心した桐生発の泥かき隊を支援する引率者役で、60回近く被災地に通い続ける金子瑞穂さん（37）は、桐生市は、活動の原点にある思いをそう語る。

「行くたびに少しはお役に立てたかなという達成感がある。でも、被災地の現状を見れば100%にはならない。もっと何かができると思う」「同じ志をもった仲間がいて、新しく参加する仲間がいて、喜んでくれる人がいるから、また行きたくなる。その繰り返しです」。その一方で、心配なこともある。「まだ（泥かき）行ってるの？」と言われることが最近多い。震災を風化させないためにも、ぜひ多くの人が参加してほしい」と呼びかける。

で検討していることなどを説明。また昭和小学の跡

